

エッセー 風の中のた

ール交換している「高岡敬明をめぐる明治・保存会」のメンバーたち。

ドングリ邸は、正式には登録有形文化財。旧高岡敬明邸(漆喰)

先日、雨を押しつけて焼き芋会を楽しんだ。

場所は甲府・善光寺の山里。クヌギやナラ、コナラ、カン等の実がなる雑木林に囲まれた愛称『ドングリ邸』だ。山時雨であったが樹間を飛び交う小さな野鳥や、小やみになると一直線に飛ぶチョウゲンボウ等の姿を楽しんだ。家主(高岡道明氏)の話では、晴れた日にはオオタカが上空を舞い飛ぶという。

しっくい系ペランダコロニアルの擬洋風建築」という。高岡敬明は明治維新期に山梨の産業基盤を作った副県令であり、後に熊本県令として西南の役で薩摩藩西郷隆盛軍の兵糧攻めに対し電信技術で戦ったのは有名である。

今年は雪が多く里山にはまだ春がきていない。ほんの少し梅のつぼみがほころび、フキノトウは枯れ葉の下で頭を出せないでいた。男衆はナタ、ノコギリ、ナイフを使い、竹林から切ってきた竹で食器や什作り。女衆はほうろくつくりやイモヤキにと楽しい時間を過ごした。集まったのは、メ

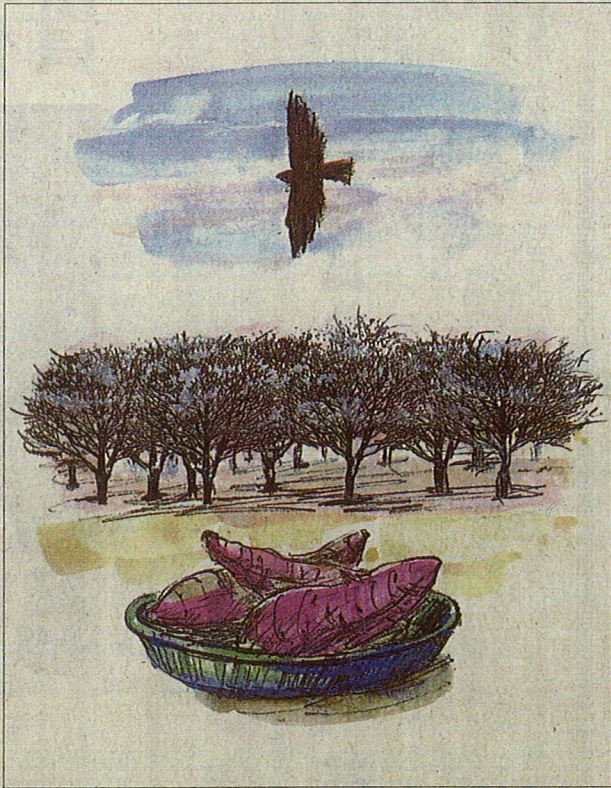
そんな旧高岡邸の小屋裏に登ってみる。西洋の構造手法ではないお蔵造りの梁(はり)の掛け方は、間仕切り壁と梁の位置が微妙にずれている。屋根荷重を外桁梁(けたびり)にバランス良く伝え、内部空間を自由に使うことを優先するための蔵つくりの技術であることが分かる。

楽しい時間を過ごした。集まったのは、メ

このように明治期の日本人が考えた洋風建築は、外観では分からない面白さがある。当時のモダニズムを住まいに取り込み、地



くぼた・かなめさん 一級建築士。東京電機大卒。1991、97年度に県建築文化賞(まちなみ景観、住宅部門)奨励賞を、また98年度にはやまなしグッドデザイン賞(生活空間のデザイン)部門賞を受賞。コミュニティ生活NPO活動にも力を注いでいる。甲府市住吉。49歳。



建築家 久保田 要

元の建築家である棟梁(どうりょう)たちが知恵した技のディテールが読み取れる。建物には、住まい手たちの夢がいっぱい託されたまま残るものと、時代の流れの中で設計者の思いを超えて造り変えられるもの、さらに、無用になって取り壊されてしまふものがある。旧高岡邸は、まさに、自然と向き合う住まい手たちの生き方や、自然と融(と)け合う建築技法が漂(た)う素晴らしい擬洋風建築である。

最近建築の自然回帰が叫ばれている。しかし果たして、本当に自然と立ち向かっている建物がどれくらいあるだろうか? もちろん、自然木や自然土を使った建物を「日本の住宅」「〇〇県の住宅」などとPRしているメーカーがあるのは事実だ。しかし、それだけで、自然と向き合った住宅と言えるだろうか。

造り手側の論理だけで建築されている限り、建物はむなししい残がいをさらけ出す。「自然と向き合う建築」というものは、「自然と融け合う」という住まいの生き方を尊重して、つまり住まい手のDNA(設計書)で創(つく)らなければならぬと思ふ。

一方で、昨今は、公共事業による箱物と言われる建築に限らず、税法上の償却が来ると御用納め(ライフスタイルの変化について行けなくなったというこじつけ)になり解体されることが多い。言うならば、自然の風化より、税の無駄遣いにつながる人為的風化の方が速い。建築家として慚(あは)れなきに堪えない。

明治五十八年に建てられ百数十年の風雪に耐えて凛(りん)と佇(たたず)む近代化遺産「旧高岡敬明邸」。メンバーたちは、次世代の子どもたちに残す住まいの教書として、この意志のある建築を見ている。建築は命をばくむ社会資本であるはずなのに、ものの価値だけを優先するこの国の仕組みの貧しさに、人々は気が付き始めている。豊かに暮らせるために手を掛け維持していくことに日本文化の底流があったはずなのに!

山時雨 松葉火おこし 竹燗酒 梅の枝添えし 和心赤飯 無要

里山のモダニズム建築